

# 同志社史を複眼で見るための書

## グリーシー著『同志社の独立…ミッション・スクールからの脱皮』

大学名誉教授 北垣宗治

### 同志社史は面白い

同志社の歴史は興味深いものである。アメリカから帰国したばかりの新島襄が、明治8年に、神道と仏教勢力の強い千年の都の真つただ中に、明治政府の「宣教師を教員として雇うことを禁ずる」法令が存在していたにもかかわらず、宣教師デイヴィスを教員とする同志社英学校の設定許可を取り付けたことは、まさしく奇蹟的な出来事だった。

デイヴィスはアメリカン・ボードの宣教師であつたし、新島も同じボードの準宣教師であつたから、同志社英学校はアメリカン・ボードの学校だった。次々に教師となるラーネッドもゴードンも、共にアメリカン・ボードの宣教師。1879年に第1回卒業生15人が巣立ち、その中から4人が教員として残り、同志社英学校は新島校長、デイヴィス、ラーネッド、ゴードン、山崎為徳、市原盛宏、森田久万人から成る7人の教員組織を固めた。週一度の教員会議は英語で運営された。

### 女学校の「明治十八年事件」

この態勢は1890年に新島が死去するまでうまく機能した。こう書けば、何の問題もなく、事態はめでたく進展していたようにひびくが、内実はそうではない。同志社女学校で起こった「明治十八年事件」は、まるで新島のノドにつきささったホネのような出来事だったと言わざるをえない。それは教育の主導権が宣教師側にあるのか、それとも日本人教員側にあるのかという問題が先鋭化した事件だったからである。女学校の舎監だった山本佐久（寛馬、新島八重の母）と八重自身は、主導権は当然日本人の側にあると考えた。また女学校の男性教員たちは女性宣教師の指揮下に入ることを潔しとしなかった。宣教師たちは怒って女学校から手を引き、女学校は機能を停止した。

1890年代の同志社は、女学校の「明治十八年事件」が形と規模を変えて再現したものとみなすことができる。独立心の旺盛な熊本バンドの人達は、デイヴィスの神学は古いと考え、アメリカン・ボードから財政支援を受けることを恥じるように

なった。ボードはボードで、同志社のキリスト教の正統性を疑うようになり、新島のアピールを容れて同志社に与えてきた金は、はたして適正に用いられたといえるのかどうかを疑問視するようになった。ボードの代表団が同志社を訪れて、直接に事態の改善を図ろうとしたが、それも不成功に終わり、同志社とアメリカン・ボードとは関係を断絶した。それだけで終わらず、アメリカン・ボードの金で建て、同志社の名義になっていた宣教師館、大口の出資をしてきた同志社病院、ハリス理化学校等に関する信託違反が問題となり、ボードは同志社の理事会を相手取って訴訟を起こす準備を始めた。この問題は不平等条約改正の実現を目前にして神経質になっていた日本政府の心胆を寒からしめた。訴訟寸前で横井時雄社長と全理事が辞任し、アメリカン・ボードが勝利するかたちとなった。

### 『同志社の独立』

このたびポール・グリーシー著・北垣宗治訳『同志社の独立…ミッション・スクールからの脱皮』（新教出版社、2012）を出版したが、本書は同志社が経験した未曾有の蹉跎から、どのようにして復興を遂げていったのかを、宣教師文書を精緻に点検することによって解明した作品である。同志社では19世紀の終わりから20世紀の初めにかけて、横井時雄、西原清東、片岡健吉、下村孝太郎と、短期間に4人の社長が入れ替わる。このうち横井と下村はアメリカン・ボードの人だが、なぜ同志社の卒業生でもない西原や片岡が社長にかつぎだされなくてはならなかったのか。

同志社創業以来の宣教師デイヴィスは、どん底まで落ちた同志社を再建するために、態勢の立て直しを図ろうと、日夜奮闘した。そしてデイヴィス以後ではアルブレヒトやロンバードという、第2世代の宣教師たちの献身的な働きがあった。

著者のグリーシー氏は1955〜57年にカールトン代表として同志社高等学校で英語を教えた人である。帰国後コロンビア大学の教育学の大学院でこの博士論文を書き上げた。

私は同志社の歴史は複眼で見ると確信しているが、本書はそれを助けてくれるといえよう。同志社における深刻な経験を通して学んだのは、同志社自体であると同時に、アメリカン・ボードもまた然りであったことを、本書は明らかにする。

国際教育インスティテュート准教授 Bruce WHITE  
国際教育インスティテュート教授 Gregory POOLE

## 1. ILAのミッションと教育特徴

2011年4月、今出川校地にThe Institute for the Liberal Arts (ILA) — 国際教育インスティテュート — が設置されました。ILAは2011年4月と9月、日本の学生に加え、近くは台湾、韓国、中国から、遠くはハイチ、スリランカ、ウガンダ、ネパール、アメリカから初めての学生たちを迎えることができ、喜びに堪えません。豊かな才能と好奇心にあふれた学生たちがこの京都の中心に集結し、共にユニークな学びの集団を誕生させることができました。現在、47人の学生が在籍していますが、今後さらに大きなコミュニティとなり、新しい知的発見の年になると期待しています。

ILAのリベラルアーツ・プログラムは、本学の教育理念を土台とし、ローカルとグローバルの相互依存関係を理解することが学修に不可欠であるという確信の下に開設されました。社会学・文化人類学・経済学・経営学・法学・政治学・国際関係学の分野の横断的学習を通して、学生たちが世界レベルで活躍

できる能力の獲得を目標としています。ILAは、学生たちが古都京都の文化的風土や、日本ならではの学習経験を活かしながら、このプログラムを通して幅広い学際的な視点を醸成し、将来その知的能力や社会的力量を存分に発揮することで国際社会に大きく貢献することを期待しています。

ILAは、大学のリベラルアーツ教育への国際レベルの取り組みとして、一つの完成形を示しています。なぜなら本学の6学部、15学科にわたるプログラムを横断する、広汎で学際的な特質を持つ教育機関として、日本の大学においても比類のない存在であるからです。ILAの教育的アプローチは、北アメリカの私立大学のリベラルアーツの雰囲気（アーモストスタイル）と、英語で行われる小規模クラスでの授業を通して学生と教員がパートナーシップを構築することに重点を置いた教育方法を融合させています。学生たちは自ら学び、精読・熟考・ライティング・ディスカッションを通して必須能力を育成することが求められます。教授陣は学生に対して単に興味深い解答を見出すだけでなく、興味をかき立てるような質問を考え出し、問い

かけることを要求します。

ILAの学生は、「日本社会と文化」「国際経済における日本のビジネス」「日本の政治とグローバルスタディー」の3つのクラスター（専攻）のうち1つを選択し、重点的に専攻しますが、ILAや日本語・日本文化教育センターの幅広い授業科目のみならず、日本語で講義されている学部科目を組み合わせて履修し、4年間のカリキュラムを各人で独自にデザインすることが求められています。

## 2. Faculty Development (FD)

ILAは5人の外国人専任教員（イギリス人2人、カナダ人1人、ベルギー人1人、アメリカ人1人）と7人の日本人職員からなる多国籍スタッフが在籍しています。専任教員からなるファカルティ・メンバーは毎学期アーモスト館のゲストハウスでミーティングを行います。これに先立つ数週間、FDの代表メンバーが各学部事務室を訪れ、各教員の研究・業務・教育作業のバランス、学生・教職員間に発生している問題、ILAシラバス、リクルート活動、学生生活、信条などに対する今後の方向性へのアイデア・構想、任務・研究の進捗度、教務環境に対する満足度等、基本的な質問事項が書かれたリストを配布・回収します。

ゲストハウスでILA教授陣は、FD主任が行ったこの調査結果のすべての項目に関して建設的な議論を重ねます。議論から生まれたすべての「行動目標」は記録され、次回の議題とな

ります。この方法は会議に参加したすべての教員が等しくその目的や方向性を共有し、その実現に力を注ぐ原動力になっています。さらに重要なことは、メンバーに不満や懸念があればそれを表明する機会として活用し、グループ全体として建設的な解決策を提案できるという重要な役目も果たしています。このようなミーティングを積み重ねることにより、適応性のある働き方や将来に対する長期的で斬新なビジョンを作り上げることが大きな役割を持つものであると確信しています。

## 3. 同志社が考える「国際化」とは

新たに設置したILAはこれまで、さまざまな課題を提示してきました。その中にはコース内容のバランスを図りながら最適なカリキュラムを提供する方法や、留学生をいかにリクルートするかなど、研究機関特有の課題もありますが、同志社のみならず日本や世界に共通している課題も多くあります。

その一つが「国際化」の明確な定義付けです。これは高等教育研究機関にとって差し迫った重要課題でありながら国内外を問わず、まだ誰も説得力のある解答を導き出せていないように思われます。

私たち自身、人類学者として国家アイデンティティ、地球市民（global citizenship）、比較教育について研究してきた立場から、この課題に十分に、また意義のあるやり方で取り組みたいと願っており、その答えの糸口は次の2点を理解することにあると考えています。

①多くの国々は国際化が真に意味するものは何かを理解するの  
に困難を抱えている

②国際化とは単に英語で講義を行う、あるいは外国人スタッフ  
を雇用するというのではない

幸い、同志社には知識やアイデアを交換し、異なる国々から  
来た人々と交流するという創立時の理念があります。従って  
我々はこの課題の解答に近づくために、同志社独自の歴史から  
出発してみるのも良いかもしれません。

本学の創立者、新島襄の渡米に関してまず目を惹くのが、そ  
れを実行する以前に彼が示した勇氣と情熱の強さです。彼は日  
本人の生活の質を向上させるためには自分の置かれた社会の外  
側にあるさまざまな形の資源を知り、手に入れることが必要で  
あることに気がついていました。日本の社会のニーズとそこか  
ら得られる資源に関する深い洞察力は、別の資源探求へ彼を駆  
り立てるエネルギーとなったのです。その後のアメリカでの新  
島の生活と行動、帰国して彼が主導した教育への取り組みは、  
彼が世界という枠組みの中で活動することの重要性を深く理解  
していたことを示しています。まさに彼にとつての生活の質は、  
ある人物が世界の一部として自らをどのように捉え、いかに活  
動するかが重要でした。新島にとつて、持続可能な生き方を見  
出す鍵は他者の意志を支配したり、他者を隷属させたりするの  
ではなく、他者の社会に参加することにあります。新島はア  
メリカ文化に精通していましたが、日本にアメリカを再現する  
ことが可能だとは考えず、またそのような関心もありませんで  
した。これを再現しようとしているという批判に対し、彼はア

メリカ人の「複製」ではなく、「新しい日本に必要な新しい人間」  
を育てようとしているのだと反論しました。彼は自らを2つの  
社会の橋渡し役だと認識し、異なったバックグラウンドを持つ  
人々がより豊かな社会へと歩むための方法を互いに提供し合え  
ることができると考えていました。

もし新島が、今日頻繁に使われる国際化という言葉について  
コメントできたなら、彼独特のおおらかな口調で次のように語  
ったかもしれません。真の国際化とは「内面」を的確に検証す  
る勇氣と情熱を持ち、より広い社会と世界に参加し、多くの社  
会から得られた考えを融合させ、最善の解決策を導き出すこと  
であると。

国際化の指針となるモデルを構築することは、大学としての  
共通のビジョンを共有できるだけでなく、我々の教育アプロ  
ーチをより広範かつ開放的な方法でグローバル教育へと導いてく  
れ、さまざまな面で我々の助けになることでしよう。従って、  
優れた国際化の実践の場合は、英語で行われる講義や外国人教授  
の数に関係なく、全ての学部にあると言えるのではないでしょ  
うか。また、このことについて新島なら「国際化という言葉自  
体が必要でなくなつたときに初めて真の国際化が始まる」と言  
い換えることができるのではないのでしょうか。

## 同志社 クローズ・アップ

### Doshisha International School, Kyoto (DISK)から世界へ

国際学院初等部・国際部校長 大迫弘和

#### 「DISK開校」

2012年3月6日から9日までの3日間、国際バカロレ  
機構 (International Baccalaureate organization = IBO) に  
よる認定訪問が行われました。認定の対象は11年生・12年生 (高  
校2年生・3年生に当たります) が学ぶ2年間プログラムであ  
るDiploma Program (DP) です。認定訪問では「Philosophy」  
「Leadership and Structure」 「Resources and Support」  
「Collaborative planning」 「Curriculum」 「Assessment」 等の項  
目に渡ってIBOから派遣された訪問官により詳細なチェッ  
クが行われました。

9日の訪問最終日に校長である私に訪問官からIBO本部に  
レポートされる内容が示されました。DISKは審査項目のそ  
れぞれにおいて認定のための条件を十分に備えている。遅くとも  
2012年夏前には最終認可を受けることになるでしょう、  
とのことでした。

そしてその時のお話しより随分早く、この3月23日にIBO

より正式認可をいただき、DISKはIB World Schoolの一員  
になり、そのことが朝日新聞等に掲載されました。

#### 「インターナショナルスクールとは？」

インターナショナルスクールである同志社国際学院国際部は  
2011年9月1日に無事開校しました。校名として世界中の  
インターナショナルスクールのリストに加えられるべく  
「Doshisha International School, Kyoto (略称DISK)」を用  
いています。

そもそもインターナショナルスクールとはどのような学校な  
のでしょうか？簡単に説明しますと以下の3要件を兼ね備えて  
いる学校がインターナショナルスクールであると言えます。

まず一つめは授業言語が英語であるということです。世界共  
通語としての位置を占めている英語により教科学習を行う学校  
です。注意していただきたいのは (特に日本国内で誤解がある  
ので) インターナショナルスクールは「英語を勉強する学校」

ではありません。「英語を勉強する学校」は言語学校 (Language School) であり、インターナショナルスクールではありません。即ち、インターナショナルスクールで学ぶためには入学の時点で既に教科学習が可能な英語力のあることが基本的な条件になります。

二つ目の要件は、そのコミュニティを形成する人たちの「多様性 (diversity)」です。コミュニティを構成するのは児童・生徒たち、保護者の皆様、そして先生方ということになります。それらの人々が様々な意味での「多様性」を有していることがインターナショナルスクールとしての要件になります。これまで「何カ国の国籍の子どもたちがいますか?」といった質問がよくインターナショナルスクールには寄せられたのですが、グローバルゼーションの進む21世紀のインターナショナルスクールでは、この質問は意味を失っています。日本の国籍を持つてはいませんが自己の文化としてアメリカの文化を内在させているお子さんや、国際結婚をされているご家庭でバイカルチュアルな形で成長しているお子さんはもはや決して珍しくないからです。国籍数では測れない多様性といったものが存在するのです。

そしてインターナショナルスクールとしての三つ目の要件は「世界標準のカリキュラム」を採用しているということです。この文章の冒頭にご紹介しました「International Baccalaureate (IB)」は世界標準のカリキュラムとしては現在最もレベルの高いもので、D I S KはこのIBを1年生から12年生までの全12学年のカリキュラムとして採用する予定です。

## 「IBとは?」

IBOはスイスのジュネーブに本部を置き、イギリスのカーディフにカリキュラムセンターを、そしてシンガポールにアジアを統括するオフィスがある国際的教育機関です。D I S Kでは1年生から5年生までのエレメンタリースクール課程でIBの初等教育プログラムであるPYPを(既に認可申請を開始しており2012年1月1日にD I S KはPYPの「候補校」として認定され、正式認可に向かって前進しています)、また6年生から10年生まではIBの中等教育プログラムであるMYPを、そして11年生・12年生はIBの最終プログラムであるDPを、それぞれカリキュラムとして採用します。冒頭に書きましたようにまずDPからD I S KのIB World Schoolとしての正式な歩みが始まっています。

IBがどのような意味で優れたカリキュラムであるか、そしてそれがなぜ同志社が設立するインターナショナルスクールに相応しいものと言えるか、以下の「IBO使命宣言」をお読みいただければ理解していただけたと思います。なお国際学院では初等部でもこのIBの手法を採用しながら日本の学習指導要領の内容を学習しています。

### 「IBO使命宣言」

国際バカロレア機構の目的は、異文化の理解と尊重を通じて、よりよい、より平和な世界の構築に貢献できる、向学心と知性に富んだ、思いやりのある若者を育てることにある。

## 「同志社とIB」

この目的を達成するために、IBOは世界各地の学校、政府、国際機関と協力しながら、国際教育と厳密な評価体系を実現できる教育プログラムの確立という意欲的な課題に取り組む。

IBOが提唱するプログラムは、世界各地の生徒たちに、生涯にわたって、積極的に、思いやりの心を持ちながら学びつづけ、自分と違う考え方をする人々も正しいことがあると理解できる人になるよう働きかけるものである。

同志社英学校としてスタートした同志社が2011年、教育理念の一つである国際主義のより早期からの充実を図るべく設立されたインターナショナルスクール、D I S K。同志社が21世紀に求められる真に国際的な教育の形を国内外に示すことが出来るよう、まずは日本を代表するインターナショナルスクールを目指していきたいと思っています。



© Ben-k

## 京町家を舞台とした京都学講座の展開 —同志社女子大学町家講座

女子大学現代社会学部准教授 天野太郎

### はじめに

同志社女子大学では、2004年度から京都市上京区のお稲荷街にある山中油店と共催のかたちで「町家で学ぶ京都の歴史と文化」をテーマとした講座を開催してきており、今春8年目を迎えることとなった。ここではどのような考えのもとで講座が展開してきたのか、同志社女子大学ならびに同志社大学の教員とも深くかわり、かつ地域との結びつきを示すひとつのありかたとして紹介していきたい。

### 町家講座のはじまり「京都学」の実践

2004年から始まった町家講座の萌芽は、その数年前に遡る。その契機は2000年に設置された同志社女子大学現代社会学部社会システム学科のなかに、「京都学・観光学コース」という名称のコースが設置されたことである。この「京都学」は、当時注目を集めていた地域学の一つであるが、学科内のコース名称としては本学が全国初であり、特徴的な存在である。

今日でこそ町家を活用した大学の講義やプログラム、あるいは町家改造のさまざまな施設が一般化しているものの、この講座ならびにその前身のプログラムをはじめた2000年においては非常に先駆的な事例であった。

### 町家講座の特徴

この町家講座は、月に1回のペースで年間10回（2012年度からは年8回）の頻度で、京都にかかわる研究者はもとより、京都の文化に深く関わる伝統芸能や産業の第一線の方々を講師として実施している。たとえば京都の仏教美術を支える仏師の江里康慧氏や王朝時代の伝統的な日本の染色技法の復原にも取り組む染織史家の吉岡幸雄氏、宝永年間に創業して以来、宗教用の薫香をはじめ、香文化の普及活動でも知られる松栄堂社長の畑正高氏など、京都文化を語る上で欠かせない著名な第一人者を招いて展開している。また、近年では同志社女子大学・同志社大学の教員による講演も織り交ぜている。これは学校法人同志社としての研究成果の一端を社会に還元する役割をねらうとともに、京都に根差した同志社の研究・教育のありかたを広く紹介することも目的としている。2011年度は本



間洋一・本学教授による書の講演が開催され、2012年度には龍谷壽・同志社女子大学名誉教授や鋤柄俊夫・同志社大学教授

京都学とは、文字通り京都に関する歴史・文化・地理・社会を総合的に地域に根差して学び、研究しようとする学問であるが、その推進者の一人である龍谷壽・同志社女子大学名誉教授（当時、教授）がコースの中心的存在となっていた。本学における「京都学」の教育と研究を推進するため、さまざまなカリキュラムが構成されたが、その一環として京都市内の町家を舞台として、京都という場所ではなく学びえない地域に根差した学問や伝統芸能、産業などの講演会を企画立案したのがその始まりである。またこの試みは、当時本学大学院文学研究科に在籍していた山中油店の山中恵美子氏の存在も欠かせない。彼女は実家である江戸時代創業の山中油店の伝統文化や、そこに育まれた町家の保存や再生のありかたなどにも龍谷教授の指導の下で研究を行い、その全面的な協力で山中油店の所有する町家の一棟を舞台とした講演会を実施しており、そのことが後の同志社女子大学との共催のかたちにつながった。現在の講座会場である「京まちや平安宮」の館主として、単に会場提供にとどまらず、その企画や運営に全面的に関わっている。

による講座が予定されている。

また、町家講座では講座内容以外にもさまざまな京町家ならではの趣向が凝らされている。会場である「京まちや平安宮」館主の山中恵美子氏により、季節に応じて掛け軸や襖などの表具が変えられ、講座の聴衆に京都らしいしつらえとおもてなしを添えている。講座のはじめには管弦楽のアンサンブルが用意され、同志社女子大学の学生による演奏は、伝統的な和の空間とも意外と調和し、観客を愉しませる要素ともなっていると共に、学科や部活動の成果を披露する貴重な場所ともなっている。さらに講座の終盤では、京生菓子がお供され、お茶をいただきながら質疑応答がなやかにひろがるのも町家講座の特徴である。四季折々の旬のテーマや、ときには講座の話題にちなんだ和菓子の提供は、聴衆の眼も舌も喜ばせている。

こうして8年間続けられてきた町家講座は、これまでのべ2500人以上の聴衆を集め、盛況のうちに続けられてきた。ここで重要なのは、先駆的な講座自体の性格や内容もさることながら、これを同志社女子大学の共催というかたちで8年間、月に1回のペースで実施し続けてきたという持続性そのものである。町家という空間を活用して、京都という地域文化の多様なあり方と学術的な知の発信は、大学と地域との関わりにつながるものであるが、震災復興の支援の際にも指摘されるように、地域を考える上で最も重要なのが持続性であり、サステイナブルな関係性である。今後とも、京町家の立地の特性と、同志社の教育・研究理念の特質を活かしながら、講座を通して地域との関わりを続けていきたい。

デジタル教科書や電子黒板など、ICT (Information and Communication Technology) を活用した教材や機器が普及し、さまざまな研究会でICTを活用した授業実践が報告されるようになった。本校では岩倉キャンパス移動時に「教科センター方式」を採用し、すべての教室に教室用ノートパソコン、プロジェクター、電子黒板をはじめとするICT機器が導入された。従来の教室環境に比べ、劇的な変化だった。その一方で、教員がこのICT環境をどのように授業で使いこなしていくかということが直面した大きな課題であった。

今回は英語の授業でICT環境をどのように活用して授業を行っているか、その一部を紹介したい。

#### ①教材作成にとっても便利！PowerPointの活用

私はPowerPointは英語のデジタル教材作成にはもってこいのソフトだと思っている。電子黒板の活用とあわせて、単語の発音練習や文章の音読練習、さらにPattern Practiceなど使い方のバリエーションは多岐にわたる。メリットは生徒が画面に集中でき、理解が深まること、デメリットはテレビ画面のように授

業が流れてしまい、その時は理解した気分になつていても、あとであまり頭に残っていない...という場合がある。このデメリット解消のため、PowerPointで配布資料を作成し、授業の終わりに「まとめ」として配布すれば生徒は授業の流れを振り返ることができる。デジタルコンテンツを作成し、それを利用して配布資料までできてしまうところが教師にとっても大きなメリットである。

#### ②指導用デジタルテキストの活用

昨年度より本校では三省堂「New Crown」のデジタルテキストを全ての英語教室とCALL教室のパソコンにインストールし、授業で活用している。デジタルテキストは校内フリーライセンスで、教科書の単語、本文の表示、音読再生はもちろん、フラッシュカード作成機能、パート別音声再生等さまざまな使い方ができ、従来の音声CDを利用した授業とは全く較べものにならない授業展開が可能である。メリットは、生徒の視線が画面に向かうので自然に顔が上がり、発話の声が出やすくなるということ、画面の切り替えがスムーズで授業のロスタイム

が少なくなること、その分、発話練習の回数が多くなるといった効果がある。

③1人1台のパソコンを用いてブレンディッド・ラーニング  
最後に図書メディアセンターで行った英語授業について述べる。この授業の流れは、次の通りである。

- 1 斉授業でデジタルテキストを用いて教科書の音読練習
- 2 不規則変化動詞の活用の練習
- 3 パソコンからeラーニングのページにアクセスし、動画 (Youtubeにアップロードしたもの) を見ながら不規則変化動詞の発音練習、過去形の英文を自分で発話して練習しながら確認した後、タイピングで不規則変化動詞のテストを行う。この間、生徒の個別学習となり、教師は机間巡視を行いながら生徒のフォローに回るといふパソコンと教師の「1人チーム・ティーチング」の形で授業を進行した。

4 生徒が隣同士2人1組になり、その授業で学んだ不規則変化動詞の過去形を用いて作成した英文を5文以上 (英文が5つでも、会話や物語の形でもよい)、eラーニングのページの掲示板に書込んで提出する。

この授業の中では「斉授業」↓「個別学習」↓「共同学習」の形で進行し、「読む」「聞く」「話す」「書く」といった英語の力を身につける



図書・メディアセンターでの授業風景

ことを目標とした。

ICT機器を使えば、分かりやすい授業になるかと言うと必ずしもそうとは限らない。結局、最後は教師の授業力にかかっている。授業のポイントがはつきり生徒に伝わらないとICT機器を使っても同じである。ICT機器を活用する際は、そのメリット、デメリットをしっかりと見極め、授業で効果的に活用していくことが大切だと考える。



eラーニングのページ  
(教材はYoutubeにアップロードした動画)